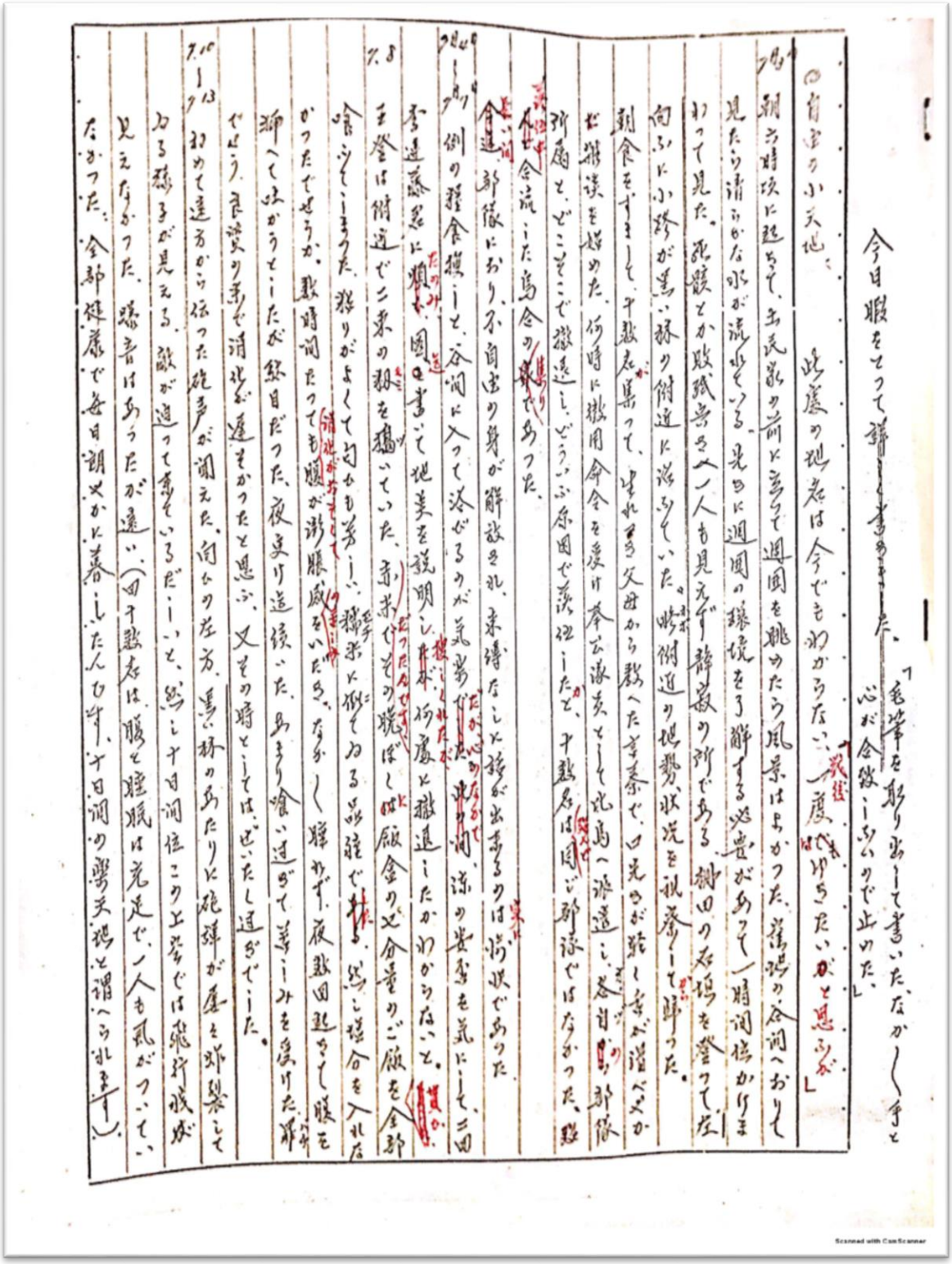
【原稿】自由の小天地



今日暇をとって「鉛筆を取り出して書いた」なかなか手と心が合致しないので止めた。

○自由の小天地

此度の地名は今でもわからない。一度ぜひたいものと思う。

朝の時分に起きて、部屋の前に出て周囲を眺めたら風景はよかった。舞鶴の谷間へおりて見たら清らかな水が流れている。見るに周囲の環境をうかがう必要があって一時間ばかりまわって見た。部隊とか敵兵等を一人も見ない。静寂の所である。御国の為に奮を誓って夜向ふに小砦が高い。孫の附近に落ちていた。時間の推移、状況を視察して帰った。

朝食をすましてから、中隊長が集って、昨日の欠出から敵への対策について、口先が強しかが議論を始めた。何時に撤退命令を受け奉公隊長として此島へ派遣し、各自の部隊所属と、どこそこで撤退し、どういう原因で撤退したか、中隊長は同じ部隊ではなかった。

会流した島谷の集りであった。

合流部隊により、不自由の身が解放され、来得なしに移が出来るのは嬉しかった。

例の雑食猫と、谷間に入って落ちるのが見事だった。昨日、孫の要塞を見に行って、三回奪還藤岩に頼む。国の書いて地美を説明し、昨日、何度に撤退したかわからない。

主砦は附近で二本の樹を踏いていた、寄せ集めその撃ぼしは敵金の丸合番のご厚を全部食べてしまった。残りがよくて切かも美しい。猫米に似ている部隊である。然し強合を入れたかったでもう。歌時間たっても腹が膨脹感をいだき、なかなか寝ず、夜歌田起きて腹を揉へて歩かうとしたが終日だった。夜更り迄後した。あまり喰い過ぎて美しみを受けた。部

でもう、食糧の事で消化が遅まかったと思ふ。又その時としては、せいたし迄ぶでした。

初めて遠方から伝った銃声が聞えた。自分の左方、黒林の辺りに銃弾が雨を降裂して力ある響きが見える。敵が迫って来ているだ…いと、然し十日間位この上空では飛行機が見えなかった。爆音はあったが遠い。(四十数名は、腹を睡眠は充足で、一人も乱がついて、なかった。全部健康で毎日朝又かに暮したんひけ、十日間の夢天地と謂へられます。)

Edited 2019-08-16

到着早時頃、私は李と向かい合い（食糧袋）、ぼくは右側の（新草林）に入った。突然二人の兵隊が小銃を持って私の前でちょとめた。「トマレ」と怒鳴った。一人は上等兵、一人は一等兵であった。心臓を震わせ私はジッと立ち止って敬礼し、手は又おろしていいかないうちに、一人の大尉が出てきた。（将校行李、将校は乃至）厳粛な顔で、才前はどの部隊か。「ハイ、御部隊です。」なぜここで迂説しているか。「部隊が壊滅に陥られて、装備後、何度に行ったか分からない、迷路中です。」笑問中、李以外三名はガヤ〳〵話ながら私の方へ寄って来た。皆呼ばれてぼくの側に立った。お前達以外に又なん名位ここにいるか。「ハイ四十数名あります。」何度に居るか。私は手を挙げて向かい山麓に居ります。」指ゼ示したら、バカヤロー。その山の上はアメリカ兵がいるんだ。お前達はこの部隊でいろ〳〵する事は出来ん。司令部から命令がある、前線でいろ〳〵している者は皆銃殺している。すぐこの柵四の小川から下りて、北に伝へろ、喜びこの通りでいろ〳〵した。皆殺しにしてやるぞ。すぐ立ち去れ。分かったか。「ハイ分かりました」武器を肩に担った様だ。後環に立って来たぼく達は、身をひくめて小川のなかからおりた。谷間を通しに若し前、迂後の炸裂音が多い。周囲の上に小煙が見えた。急いで谷間に環が込んだ。小型のピストル弾もあるか、分からなかった。

ぺっぺっと唾を吐って四十数名に対し。「向かい山は日本の部隊がそこにいる。われ達の住んでいる新崖の上はアメリカ兵がいる。ぼく達はその中間に挟まれている事を説明した」

みんな顔は真っ蒼に変ってきた。互に見合わせながら、ぼんとうか、なぜぼくたちは分からなかったか。そうなればどうするかと、まるで死の淵に陥入れた様な感じであった。

終に一同は私の意見に従がうと、ぼくは先づ、装具を先に準備してから進退を決めようと。どうせ、「再びこの通りで見られたら銃殺」且つこの附近で進退する所はないし、又何日間、ここで目茶部隊が討伐するか分からない。敗戦も出来ないし、更に向かい山からハッキリとぼく達の度胆見える。遠い移に隠されてゐるけれども、ここ此處から離れる以外方法ない。

全兵装具を整理した後、私は参考として話し出した。

Scanned with CamScanner

今日暇をとって詳しく書きました。「毛筆を取り出して書いた。なか〳〵手と心が合致しないので止めた。」

◎自由の小天地

此處の地名は今でもわからない。

「戦後一度はゆきたいと思ふが」

7月3日

朝六時頃に起こって、土民家の前に立って、週囲を眺めたら風景はよかった。窪地の谷間へおりて見たら清らかな水が流れている。先きに週囲の環境を了解する必要があって一時間位かりまわって見た。死骸とか敗残兵さへ一人も見えず静寂の所である。棚田の石垣を登って左向ふに小路が黒い林の附近に沿ふていた。略(ホボ)附近の地勢状況視察してから歸った。

今天利用閒暇時間，詳實地以文字記下。「拿出了毛筆來寫，但是執筆時手不大聽使喚，只好作罷。」

◎自由的小天地

至今仍不知此地之名。

「但是戰後很想再去一次」

7/3

早晨六點起床，在當地民房前面站著，放眼望去，風景甚佳。往山谷間低窪處下行，一瞧，即見清澈水流。唯先勘察周圍環境有其必要，故又耗了近一個小時的時間巡視四周。覓不著傷殘敗兵影蹤、只見枯骨的這裡，是個寂靜之地。緣梯田石牆登上，往左即一小徑蜿蜒黑森林旁。稍稍視察這一帶的地勢狀況完隨即調頭回去。

Edited 2019-08-16

朝食をすまして、十数名が集って、生れてき父母から教へた言葉で、口先きが軽く舌が滑べやかに雑談を始めた。何時に徴用命令を受け奉公隊員として比島へ派遣し、各自の[iii]部隊所属と、どこそこで撤退し、どういふ原因で落伍したかと、十数名は殆んど同じ部隊ではなかった、落伍中[iv]合流した烏合の集り[v]であった。長い間[vi]、部隊におり、不自由の身が解放され、束縛なしに話が出来るのは実に惨状であった。

7月4日—7日 例の糧食捜しと、谷間に入って浴びるのが気楽だが、心なかで[vii]、陳の安否を気にして、二回李連藤君にたのみ[viii]、國迄書いて地点を説明し、捜しくれたが[ix]、何処に撤退したかわからないと。

用完早餐後，有十多個人聚集了起來，用著生來自父母習得的話語，七嘴八舌地閒聊了起來，內容諸如闡述自己何時接到召集令，而以奉公隊員名義派遣至比島，又分屬於哪個部隊云云；或是談著從某某地執行撤退之後，又為何故與隊上走散、進而脫隊。這十多個幾乎原本無一隸自同屬之兵，脫隊後遂湊合成了一群烏合之眾。長期於禁錮部隊裡不得自由之身，一旦得到解放，無拘無束所發之語，實在令我不忍卒聞。

7/4-7 雖在某次例行性的糧食搜索，進到谷澗暢快洗浴了一番，心裡卻是掛念著陳瑞忠，不知他是否安好？還央託了李連藤兄兩次，寫信回台說明所在地點，這樣才好找到我們，可是就連撤退時的地點在哪，都不曉得了。

7月8日

王登は附近で二束のをいていた。赤米[1]だたんです。で、その晩ぼくに[x]飯盒の七分量のご飯を貰ひ、全部喰ツてしまった。粘りがよくて匂ひも芳しい。糯米(モチ)にゐる品種でした[xi]。然し塩分を入れなかつたでせうか。数時間たっても消化がおそくて腹が澎脹感の苦しみをいだき、なか〳〵睡れず、夜数回起きて腹を抑へて吐かうとしたが、駄目だった。夜更け迄続いた。あまり喰い過ぎて苦しみを受けた。罪(バチ)せう。良質の米で消化が遅そかつたと思ふ。又その時としては、ぜいたく過ぎでした。

7/8

王登在附近舂了兩穗稻子，是紅糯米來著。當晚，我把填足飯盒七分滿的紅糯米給吃光殆盡。這種米飯粘性佳、又富有香氣，品種近似於糯米。然而，大概是沒攝取鹽份吧？過了幾個小時之後，都還消化不完，腹部開始因脹氣而感到痛苦，夜裡反覆不能成眠，數度起床想用壓迫腹部來催吐，卻無濟於事。狀況一直持續至午夜方休。吃太撐而受苦，簡直在自討苦吃不是？想想，都吃了這麼優質的米，還沒能好好消化吸收，想那時的自己，未免太過於奢侈了吧。

[1] 可能為紅糯米或紫糯米（菲律賓當地常見）。

7月10日—11日 初めて遠方から伝った砲声が聞えた。向ひの左方、黒い林のあたりに砲弾が屢々炸裂してゐる様子が見える。敵が迫って来ているだしいと、然し十日間位この上空では飛行機が見えなかった。曝音[2]はあったが遠い。

（四十数名は腹と睡眠は充足で、一人も虱がついていなかった。全部健康で毎日朗やかに暮したんです。十日間の楽天地と謂へられます。）

7.14.

朝、十時頃私は李[3]と向ひの山へ食糧捜し、ぼくは右側の杆草林（高サ2m余り）に入った。突然二人の兵隊が小銃を持って私の前でさしとめた。「トマレ」と怒鳴った。一人は上等兵、一人は一等兵であった。

7/10.—11. 開始聽得到遠方傳來的砲聲。不時看得到朝著左方飛過去、以黑森林為目標持續轟炸的景象。敵軍似乎逐漸逼近之際，我們這一帶卻有大概十天左右時間，上空連一台飛機也沒看到。聽得到爆炸聲，但還遠著。

（四十多個人，每個人都能吃得飽、睡得好。全員無恙、一蝨不染，健健康康地過著富有朝氣的每一天。這十天，說是在世外桃源生活也不為過。）

7/14.

早上十點左右，我跟李連藤去到對面的山裡找尋糧食，我進到右側的「杆草林」裡。突然有兩名士兵，手中握著把小手槍，在我前方指示要我停下。怒斥了聲「不准動」。其中一人是上等兵、另一人是一等兵。

[2] 今作「爆音（ばくおん）」

[3] 李：指李連藤

心悸を受けた私はジット立ち止って敬礼し、手は又おろしていないxii ないうちに、一人の大尉が出てきた。（体格約172 m位、体重は75 kg位。厳粛な顔で、オ前はどの部隊が「ハイ、柳部隊です。」なぜこゝで〳〵しているか。「部隊が爆撃にやられて、空襲後、何處に行ったかわからない。追及中です。」質問中、李以外二、三名はガヤ〳〵話ながら私の方へやって来た。皆呼ばれてぼくの側に立った。お前達以外に又なん名位こゝにいるか。「ハイ四十数名あります」何處にるか。私は手を挙げて 向ひの山麓に居りますと」指を示したら、バカヤロー、その山の上はアメリカ兵がいるんだ。お前達はお前線でウロ〳〵する事はん。

受到驚嚇的我，頓時全身挺直僵硬地行禮，待手都還沒放下的時候，一名大尉走了出來。(目測身形約在 172 公分上下，體重約有 75 公斤重。一臉嚴肅地問『你是哪個部隊的』「報告長官，是柳部隊。」『那怎麼跑到這裡來鬼混啊？』「報告長官，單兵部隊遭到砲擊，空襲後不知道該往何處，當前還在試著跟上隊伍。」質問過程中，李連藤以外的二到三名人員，一邊嘀嘀咕咕交談著、一邊朝著我這裡靠過來。大家都被叫過來站在我旁邊。『除了你以外，大概還有多少人在這裡？』「報告長官，還有四十幾名人員。」『他們在哪？』我舉起手說道：「就在對面的山腳下」一邊朝那指了過去，『蠢貨！在那個山頭上的是美軍啊。誰准你們這些傢伙給我在前線鬼混的！

司令官から命令がある。前線でウロ〳〵している者は皆銃殺していゝ、すぐこの棚田の小川から下りて、皆に伝へろ、再びこの辺りでウロ〳〵したら皆殺してやるぞ。すぐ立ち去れ、わかったか。ハイわかりました」鼠が猫に逢った様だ。雀躍に上って来たぼくは、身をひくめて小川のなかからおりた。谷間の近くに着く前、連続的の炸裂音があり、田圃の上に小煙が見えた。急いで谷間に躍び込んだ。小型のロケット弾でせうか。分からなかった。

さっそく坂を登って四十数名に対し、「向ひの山は日本の部隊がそこにいる。われ達の住んでいる断崖の上はアメリカ兵がいる。ぼく達はその中間に狭まられている事を説明した」

司令官有下令，說在前線鬼混的格殺勿論。趕快給我沿著這個梯田的小河下去，傳達給每個人知道。再給我來這鬼混，我見一個宰一個。懂了嗎？還不快去！「報告長官，懂了。」簡直就像是老鼠碰到貓一樣。雀躍登上山坡的我們這團人，蹲下身子泡著從小溪下去。抵達谷地前，聽到了連續幾聲爆炸聲，接著就見到田園上方有小煙冒出。情急之下，趕緊縱身躍入谷裡。原來是小型的噴射彈呀，實在是前所未見呢。

我趕緊爬上斜坡，對著四十多人說，「對面的山有日本軍部署，我們所住的斷崖上方則有美軍。我將我們夾在兩軍當中之勢解釋了一番。」

みんな顔は真ッ蒼に換へ、ゑひに見合ひながら、ほんとうか、なぜぼくたちはわからなかったか。そうなればどうするかと、まるで死の淵に陥入れた様な感じであった。終ひに一周は私の意見に任かせると、ぼくは先づ、装具を先に準備してから進退を決めようと、どうせ「再びこの辺りで見られたら銃殺」且つこの附近で退避する所はないし、又日間、こゝで日、米部隊が対抗するかわからない。炊飯も出来ないし、更に向ひ山からハッキリとぼく達の處も見える。深い林に蔽ふれてゐるけれども、……此處から離れる以外方法ない。全員装具を整理した後、私は参考として話し出した。

眾人的臉色鐵青，正當茫然地面面相覷之時，這是真的嗎？為何之前都不知情呢？既然如此又該如何是好？彷彿深陷在死亡之淵般的感受。最後圍成一圈，遵從我的意見，由我領頭，先整頓好裝備，再決定是進還是退，畢竟有那句「再次出現在這附近就格殺勿論」，再說附近既沒有可退之路，也不曉得待著，要讓日軍、美軍對上幾天才會停火。不僅沒能開伙，而且還能從山的另一頭把我們看得一清二楚，即使有叢林能作為掩護，……看來除了離開此地已別無他法。全員整裝完畢後，我說了出來供大家參考。

※ 前文謄録日語稿裡摻有之羅馬數字、對應其原稿上硃批前之文字另註於下：

ⅰ 「でも」
ⅱ 「が」
ⅲ 「から」
ⅳ 「殆んど」
ⅴ 「衆」
ⅵ 「今迄」
ⅶ 「でした。此の間」
ⅷ 「煩ひ」
ⅸ 「たび」
ⅹ 「は」
ⅺ 「ある」
ⅻ 「ゐ」